

記事を読んで下の問いに答えましょう。

1 傍線部①「共感」が「あらぬほうへ屈折してしまう」とはどういうことかを説明した次の文の空欄に、本文中から適切な漢字2字の語句を抜き出して入れましょう。

共感が人びとの中で、何らかの共有できる(A)や(B)から起こるものなら、(A)や(B)を共有しない人々の間に(C)や(D)を引き起こすことになるということ。

A	B	C	D
---	---	---	---

2 傍線部②「共感しやすいもの」とはどんな人のことか、本文中から漢字2字で抜き出しましょう。

3 傍線部③のように「共感」が屈折に脚を掬(すく)われないようにするためにはどうすればよいと筆者は言っていますか。次の文の空欄に本文中から適切な語句を抜き出して入れましょう。

人は理解しあえるはずだと思うと、理解しあえなかったとき(A 2字)や(B 3字)を感じて、(C 17字)しまう。共感をあたりまえのこととせず、理解できない、伝わらないままで便宜的な(D 2字)から行うべきである。

A	B
C	
D	

多様性を懐深く受け容れるような社会は、だれにとっても望ましい社会である。マイナーであることで生きることには怯えや困難をおぼえることのない社会、だれもが取りこぼされることのない社会、である。そしてそういう共生社会を実現し、維持するために不可欠の心持ち、ないしは感受性として、〈共感〉とこのことがしばしばいわれる。

〈共感〉とは、苦しむ他者を見てその痛みや苦しみを分かち持つこと、あるいは他者の苦しみを想像してその思いを汲むことである。しかし、そうした〈共感〉はいったいどこまで可能なのだろうか。いや、そもそも共感するところがなければ、ひとは共存も共生もできないものなのだろうか。

人びとの共同生活を根底で支えているものの一つがこの〈共感〉であるとは疑いない。にもかかわらず、これを無条件に肯定するわけにいかないのは、この情動ないしは想像力が(1)からあらぬほうへ屈折してしまうからである。

〈共感〉がもし、往々にしてそう考えられているように、人びとがたがいの内に、何らかの共有できる価値や習俗、宗教や民族性などを見つづけることで、その存在を地続きのものと感じるようになり、起動するものであるとすれば、〈共感〉は当然のことながら、そうした価値や習俗などを共有しない人びとのあいだで対立や分断を引き起こしてしまふ。共通項を媒介とした結びつきは「同化」の拡張にほかならないからである。それは人の集団を共属と敵対という二つのグループに分断する。

概念上の限界

もちろん西洋社会の「人間」(男性)が「同化」の対象を、異なる人種や奴隷、女性や子どもへと

〈共感〉の屈折

NIEワークシート 高校

共生分かりあえずとも

(多くは「保護」のかたちで) 拡張していったわけで、そこから「人権」という理念も生まれたが、しかしこの「人」についても概念上の限定があり、それを共有する者だけが「人」として認められた。そのかきりで「同化」は「併合」でもあったといえる。

「私」を他者へと向けて開くことは、皮肉にもこのように「私たち」として閉じるようになる。「人権」を謳う「人間」は、ほかならぬ「私たち」の最大の拡張であった。そして宗教や民族性、さらには性における差異を、おなじ「人間」概念の下に包摂するなら、それぞれ別の場所での決定的な意味をもつそれらの現実的な差異も、たやすく跨越されかねない。そういふ危うさも〈共感〉にはある。

〈共感〉をめぐる、さらに別の難しさを指摘する人がいて。紛争地の最前線で活動する「テロ・紛争解決スペシャリスト」、永井陽右である。共感という病(か

んき出版)という著作のなかで彼は、おなじ〈共感〉の対象であっても、②共感しやすいものとそうでないものがあるという。共感しやすいのは、相手が置かれた状況が理解でき、だからじぶんの思いも重ねやすい幼子や被害者といった「弱者」である。反対に、共感しにくいのは犯罪者や加害者、あるいは役得の人、傲慢な人である。これらの人たちの困窮に対しては「いい気味だ」とすら思う。そしてネットで彼らの個人情報や白日の下にさらし、まるで自警団のように集中攻撃しする。

永井は、テロリストら、ふつうには共感しにくい人たちのテロ組織からの投函促進と社会復帰支援などの実務に長く携わってきた活動家だけに、〈共感〉についてもこのようになかなかシビアな視点をとる。そして〈共感〉は、現代社会では、消費者の共感を得ようとして企てられる商品宣伝の世界に浸透しているのみならず、個人の

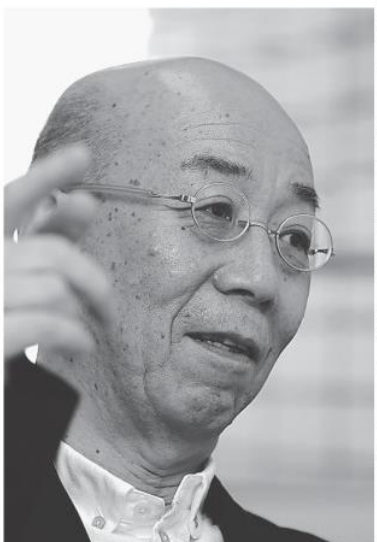
承認欲求を肥大化させるSNSの仕様(「いいね」がその一例)のかたちで、「共感中毒」や「共感疲労を煽つてもいると指摘する。

③「共感」は「同化」の拡張であるかきりで、このような屈折によく脚を掬われる。そしてたがいに分かりあえないと、なぜ分らないのかと、たやすく怒りや憎しみに反転する。だからさそひとは共感」をあたりまえのこととせず、その手前にいったん戻す必要があるのだから。理解しあえるはずだという前提に立つと、ひとは理解しあえなかったときについ、共存できたかもしれない場所を閉じてしまつからだ。

永井はかつてロンドンに滞在したとき、街その「圧倒的な多様性」に驚愕したが、その一方で「皆暮らしている場所や生活範囲はそこまで混ざっていないよう」に感じたという。多様性という美しい語の響きとは違って、「どちらかと言うともっと、泥臭く、緩やかな緊張というか壁一枚挟んだ感覚」といつか、心からの共生というよりは便宜的な共生のような体感だった。

困窮する人たちの支援の活動も、だから「分らない」「伝わらない」という限界を解消しようとするのではなく、むしろその戸惑いというか、すっきりしなさを織り込みつつなされるべきものなのだろう。「おなじ」だとか「ともに」という語にはよくよく注意が必要だろうだ。

わした・きよやす 1949年京都市生まれ。京都大学大学院博士課程修了。元大阪大学総長、前京都市芸術大学長。せんだいメディアアテック館長。専門は臨床哲学。「モードの迷宮(サンクトリー学芸賞)」「聴く(エトワール)」「桑原武夫学芸賞」など著書多数。



鷺田清一

汀にて

みぎわ

1949年京都市生まれ。京都大学大学院博士課程修了。元大阪大学総長、前京都市芸術大学長。せんだいメディアアテック館長。専門は臨床哲学。「モードの迷宮(サンクトリー学芸賞)」「聴く(エトワール)」「桑原武夫学芸賞」など著書多数。

◇次回7月下旬に掲載予定です。

NIEワークシートのこたえ（2024年5月7日公開）

◆ワークシート「共感の屈折(国語)」

2024.4.27付 朝刊 文化 13面 解答

- 1 A B 価値・習俗・宗教 のいずれか
C D 対立・分断 のいずれか

2 弱者

- 3 A 怒り B 憎しみ
C 共存できたかもしれない場所を閉じて
D 共生